

交流の場としての日曜学校 ― 岡山伝道所の取組み

さんべい ながとし
三瓶 長寿 (岡山伝道所応援教師)

教育委員会から、日曜学校活性化のために岡山伝道所が開いている「こひつじ文庫」について紹介するように求められました。群れも小さく、小児会員もない伝道所が周辺の子どもたちにどのようにしたら出会うことができるのかを考えて、4年前「こども文庫」を開きました。諸教会から3千冊の絵本、児童書を送っていただき、毎週土曜日の午後開館し、開店休業の日もありますが、読み聞かせや紙芝居、クラフト作り、貸し出しなどをしています。30人ほどの子どもが登録しています。

また夏休みには「親子オカリナ作りの会」を開き、今年は6回目です。さいわい日曜学校に指導できる教師がいるので開けるのですが、毎回20組ほどの親子が参加し、粘土をこねて笛を作るのに1日、1週間後に焼き上げます。その間オカリナ演奏を聴き、音遊びをしたり歌ったり、昼食を共にし、2日目は音階練習ややさしい曲を吹きます。幾組かの親子はその後クリスマスやイースターにつながっています。

伝道所の教師は5名ですが、毎週の子ども説教、土曜日の「こひつじ文庫」の開館、毎月の「こひつじ通信」、7月は「第6回夏休み親子オカリナ作り」(8月5日、25日)の準備で、1年中大忙しです。

これらの活動は子どもたちにイエスさまを伝えたいという伝道と、本を好きになって欲しい、素朴な土の音色が好きになって欲しいという願いからはじめられました。しかし活動をつづけていくなかで、今日の日曜学校や教会のあり方について考えさせられることがあります。それを発題的にしします。

神の民、信仰共同体(教会・日曜学校)は、本来二つの務めを担ってきました。①「礼拝への結集」と、②「伝道への派遣」です。しかし旧約時代から今日までの神の民の働きを顧みると、もう一つの務めをしてきました。それは③「この世の人々と交流する信仰共同体」です。聖書のことばでいえば「仕える教会」です。主イエスが使徒たち(教会)をお選びになったのは、「①彼らを自分のそばに置くため、②また、派遣して宣教させ、③悪霊を追い出す権能を持たせるため」でした(マルコ3:14-15)。

教会は「キリストのからだ」です。それゆえ教会の働きはキリストご自身の働きに由来し展開します。キリストの許に多くの人々が来て足下に伏して礼拝し、また伝道へ派遣されました。そしてキリストは、いやしを求める者、問いを携えて来る者の話に耳を傾け、語りあい、議論し、食事を共にし、さらにイエスさまに抱いてもらいたいと子どもを連れて来る母親などが集い、キリストはその求めに豊かにお応えになりました。

交流する空間は、人々が自由に出入りし、交ざりあい、やりとりし、入る者、通過して行く者、ユーターンする者などさまざまです。そのような場、交流する空間としての教会、日曜学校です。

信仰共同体の歴史を顧みると、シナゴグは礼拝、宣教の場であるとともに、子どもたちの養育の場、教育の場でした。古代の教会は治療し、休息を与え、困窮した人たちに食事を提供し、老人の憩いの場、またホーム、隠れ家になりました。18世紀末のロバート・レイクスによる日曜学校の発端も、産業革命下の困窮した幼少年労働者を不良化から救済するために読み書きと聖書を教えることから始まりました。またバスケットボールやバレーボールが少年たちのために考案されたのも19世紀末アメリカのキリスト教からでした。戦後の日本の教会も、幼稚園や保育園をもちました(教会への経済的サポートの面もありましたが)。日曜学校生徒の出席が減少するなかで、ある時期、日曜学校を「カテキズム教育」に限定すべきだという主張がありましたが、それは教会を超えて全被造世界に働く聖霊の普遍のみわざ

を狭めてしまうことになるでしょう。

教会はいつもその時代の必要に応える奉仕の働きを創出してきました。「この国から貧しい者(ニーズ)がいなくなることはない。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい」(申命記15:11)。いま私たちの国は豊かで、多くの子どもたちは配慮され、元気に育てられています。しかし後期資本主義社会が生み出す過度に偏った物と金と享楽、そして氾濫する情報など、幼いところをゆがめる重圧の下に子どもたちは置かれています。若者の犯罪が多発し、こころを病む子が増え、発達障害の子もいます。さらに障害をもった子、家庭環境にめぐまれない、また経済的に困難な子、在日外国人の子たちもいます。

そのようななかでいま日曜学校は大切な働きが求められています。それは交流の場、恵みの空間としての日曜学校です。そこは神のご支配と、キリストの愛といのち、聖霊の風が静かに吹くところです。そこで子どもたちは信仰をもった教師たちとしばらくのときを共に過ごす、それはどんなに価値あることでしょうか。いま一人一人がかけがえのない子どもとして、個性として受け入れられることが大切です。

そのような働きはすでに諸教会、日曜学校でいろいろとなされています。岡山市内のタウン紙に「土の音発見! オカリナ作り」の記事のつぎに、ある教会の4日間の「夏休みの宿題をがんばる会」の案内がでていました。ほかに子供会、音楽サークル、勉強塾、英会話、絵の教室、陶芸教室、クックしよう、週1回11時から2時までのお年寄りの昼食会(百円)……などをしている教会もあります。私たちは幼子や障害児のために25年もつづけられている「札幌発寒おもちゃライブラリー」についても聞いています。小さな空間、交流の場で子どもたちが信仰をもつ先生の人格とふれあう機会はどんなに貴重でしょう。

交流の場としての日曜学校は、伝道を直接の目的にはしません。神の愛の時間・空間を少しオファーするだけです。来た子どもたちが無意識のうちにキリストの香りを吸い、神の愛とキリストのいのちに、いつときでもふれてくれればそれでよいと思います。

キリストが72人を伝道につかわされたとき、こういわれました。「収穫は多いが、働き手が少ない」(ルカ10:2)。伝道に出かける弟子たちに「収穫は多い」、刈り入れはそなえられているといわれた。その刈り入れは彼らが蒔いた種ではありません。だれかが種を蒔き、水をやり、育てた収穫です。「一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる」(ヨハネ4:37-38)。別の人とは、聖霊であり、先達であり、ほかの教会、よその信仰者です。その労苦の実りを私たちは刈り取ることができます。伝道は自分の教会のためにするものではありません。神の国の伝道です。自分たちの教会に日曜学校の生徒がいてもいなくても、神がお造りになったたくさん子どもたちがいます。私たちは手をこまねいている時間はありません。日曜学校に閉店休業はありません。だれかが刈り取るために私たちはせっせと種を蒔かねばなりません。それが交流の場としての日曜学校です。

交流の場としての日曜学校プログラムの創出は、それに携わる「賜物」と、それへの「召し」が必要です。計画や理念ではできません。だから主は言われます。「収穫のために働き手を送ってくださいるよに、収穫の主に願いなさい」(ルカ10:2)。